## 43 靖国神社はなぜつくられたのか

~報国隊・赤心隊と東京招魂社~

「靖国神社」と聞いてあなたが連想するもの、それは愛国のために戦死した人々を祭神として祀る哀悼の拠所であろうか、それともA級戦犯合祀という重い問いかけをアジア諸国から受ける戦争責任の場であろうか。戦後60年が過ぎた今も、「靖国」は、私たち日本人にその立場により様々な思いを抱かせる場であることだけは確かである。しかし、靖国で祀られている祭神が戊辰戦争にさかのぼること、そして1879(明治12)年に靖国神社と改称される以前には招魂社とよばれたこと、さらには招魂社が創建される大きな要因に、明治維新の激動期(嵐)に翻弄された静岡県の神主たちの処遇があったことを知る人は少ないのではないかと思われる。

## 1 明治初年の神主襲撃事件

慶応から明治へと年号が改められたばかりの1868(明治元)年12月22日、草薙神社(静岡市清

不思両手ニテ抜刃を押へ、左右之指数ヶ所疵請候ニ付、迚も難之間え立入候処、引続座敷え押込、理不尽ニ額え切付候ニ驚、 届出候付、 何方え罷越候哉行衛不相分、〔後略〕 郡吉田在え罷越候二付、蝋燭貰受度旨申聞候間、可差遣存、 ト存候内、 門戸を打キ候もの有之、無程怪敷物音相聞候ニ付、様子可見届 相糺候処、 (史料1) (前略) 駿州有度郡草薙村草薙明神森太郎左衛門方え狼藉もの 同人養子森斎宮并小もの勇八疵受候段、右太郎左衛門より 山手之方え逃去、 侍体之もの二人弓張提灯を携、台所入口え罷越、 去ル廿二日、 為検使在所詰家来差遣、見分之上右斎宮一ト通リ為 元赤心隊森斎宮暗殺未遂に付届 《『静岡県史』資料編16近現代一 〔中略〕庭先ニ刀之鞘并丸ニ三ツ引之 親太郎左衛門留守中、 明2・1月 同夜五ッ半時頃 66 頁 奥同

水区)の神主森斎宮の暗殺未遂事件が起きた。〈史料1〉は、 静岡藩に提出されたこの事件の報告である。何者かに襲われ殺されかけた斎宮は、両手で抜刀を押さえ手傷を負いながらも難を逃れたが、下僕は重傷を負った。襲った侍は逃げ去っている。実はこの前日、少し前に同様に襲撃された御穂神社神主太田健太郎が、その疵がもとで死亡している。襲われた神主たちに共通する経歴、それは彼らが駿州赤心隊の元幹部である点であるが、なぜこうした襲撃事件が続発したのだろうか。

## 2 官軍に率先協力した神主たち

実はこの事件の背景にある出来事は、約1年前の正月にさかのぼる。鳥羽・伏見の戦いで幕府方が敗れ賊軍となるや、朝廷は江戸をめざし慶喜追討の東征軍(管軍)

を出発させた。天領や旗本領、譜代大名が混在し勤王か佐幕かで迷う代官や諸藩も多かった東海道筋では、御三家筆頭である尾張藩などが勤王方についたことで官軍に呼応する動きが表面化した。そのなかで民衆のなかから積極的に官軍に呼応したのは、国学を学びその影響を受けた静岡県西部の神主たちである。尾張藩勤王勧誘係と協力した彼らの働きで、その動きはたちまち県下各地の神主たちに広がり、2月下旬までには諸藩の支配下に属さない独自の神主たちの隊が次々に結成された。〈表 1〉はその一覧で、中心は遠江の遠州報国隊や駿河の駿州赤心隊である。

3月5日有栖川宮熾仁親王を大総督、西郷隆盛を参謀とする大総督軍は駿府まで進軍した。要所の警備を命じられた報国隊や赤心隊の幹部は、従軍を求め嘆願を重ねた。4月9日、従軍を許可された両隊は江戸に進発し、21日に大総督が無血開城直後の江戸城に入ると西の丸紅葉山の警

備に加わった。さらに、フランス式大砲を備え大総督の身辺警護にあたる御守衛大砲隊が、彼らのなかから編成された。本隊、大砲隊とも、江戸城各門や金座・銀座の守衛についた。さらに5月15日には、上野寛永寺に立て籠もっていた彰義隊の討伐が行われると、その敗兵との戦いにも参加した。勤王の志が厚い彼らは、にわか仕立ての編成ながら官軍諸藩の兵士に劣らず、よくその兵士としての役割を果たしたのである。その一方、6月2日に江戸城西の丸で行われた官軍戦死者の霊を祭る神道祭式の招魂祭では、報国隊の大久保初太郎(春野)が祭主を勤めるなど両隊の者が中心的な役割を任されている。彼らは、宗教的な面においても新政府に尽くしていたのである。

〈表 1 〉静岡県下で結成された神主を中心とした諸隊

地域	隊名	編成	中心的人物	江戸へ従軍	御守衛大砲隊
遠江	遠州報国隊	・川西隊 (天竜川以西) ・川東隊 (天竜川以東)	杉浦大学(浜松諏訪神社)、 桑原真清(津毛利神社)など 大久保忠尚(淡海国玉神社)	約87人	内27人
駿河	駿州赤心隊	・府辺組(駿府付近) ・山西組(安倍川以西) ・大宮組(富士川以東)	志貴昌信 (府中惣社神社)、森斎宮 など 鈴木盾雄 (焼津神社)、青山元胤 (青 山八幡宮) など 富士亦八郎重本(富士本宮浅間大社)	約49人か	内10人
駿東	駿東赤心隊	伊吹隊より独立、拡大	神尾因幡守、植松伊織、川口能登、 興津主膳	従軍せず *伊織は別	
伊豆	伊吹隊	三島大社の社家等中心	矢田部盛治 (三嶋大社)	従軍せず	
伊豆	玉鉾隊	伊吹隊より独立、拡大	槙大和 (守山八幡宮)	従軍せず	

静岡県神社庁『明治維新静岡県勤皇義団事歴』、若竹秀信「駿州赤心隊始末」などより作成

## 3 逆境の帰国後と東京招魂社の成立

東北地方の平定が落ち着いた11月、報国・赤心両隊隊員の大部分は政府より感状をもらい、京都に凱旋する大総督宮を警護して駿河、遠江に帰還した。しかしそこに待っていたのは、一大名に落とされ駿河・遠江70万石に移封してきた徳川家であり、大混乱のうちに移住してきたばかりの旧幕臣たちであった。新政府は徳川家に対して、隊員たちに不都合な扱いをしないように命じている。しかし旧幕臣のなかには、討幕派に率先して参加した彼らを快く思わぬ者も多く、つけねらう噂も流れていた。〈史料1〉で紹介した神主たちへの襲撃事件は、そうした不穏な動きの一端を示す事件であったのである。

不安な状況を相談された在京中の富士亦八郎重本 (元駿州赤心隊隊長) や陸軍に任官した大久保初太郎は、早速長州藩出身の軍最高幹部である兵部大輔の大村益次郎に相談した。軍制改革を進め徴兵令による国民皆兵の軍隊創設をめざしていた大村は、制度や兵器を整えるだけでなく、国のために戦死した兵士を天皇自らが慰霊・顕彰することが非常に重要なことに気づいていた。彼は、戦場となった上野東叡山寛永寺領を没収し、そこに官軍将兵の戦死者を祀る招魂社を建設、報国・赤心両隊の神職が移住奉仕することを提案した。すでに長州藩をはじめ各藩で独自に始められた各藩の国事殉難者の慰霊を、新政府が国家規模で行おうとする構想で、大村の伺書は新政府で承認された。場所は戦いの跡が生々しい上野から変更、6月29日東京招魂社は皇居に近い九段號に創建され、戊辰戦争官軍等戦死者3.588柱が合祀された。

報国・赤心の元隊員たちのなかには、積極的な東京移住論をとる者や逆に非移住論を唱える者もあった。しかし状況は切実であり、結局両隊各32人、計64人の元隊員が東京に移住した。1869 (明治2)年11月23日、招魂社の社司に62人が任命された。東京招魂社は、その後1879年6月に靖国神社と改称、戦死者やその他の合祀者を順次拡大させて現在の姿に至るのである。

〈参考文献〉

静岡県神社庁『明治維新静岡県勤皇義団事歴』 『静岡県史』通史編4近世二